

地域に根差した生活科・総合的な学習の時間の実践

前日本国総領事館付属商工会議所立ホーチミン日本人学校 教諭
神奈川県横浜市立義務教育学校西金沢学園 教諭 井上 真友子

キーワード：ベトナム、ホーチミン、生活科、総合的な学習の時間、体験学習

1. はじめに

ホーチミン日本人学校の児童生徒数は、2015年度426名、2016年度445名、2017年度531名と年々増加傾向にある。英オックスフォードエコノミクスがホーチミン市が2021年までに「アジア第2位の成長都市となる」とする予測を発表したように、近年のホーチミン市の経済開発は目まぐるしい速さで進んでいる状況である。これらの事情から、ホーチミン日本人学校での生活科や総合的な学習の時間においては日本以上に実践が困難なカリキュラムがある。毎年綿密なカリキュラムの見直しが必要とされている。

2年生の生活科、5・6年生の総合的な学習の時間で行った実践の一部を紹介する。

2. 「生活科」実践報告

ホーチミンは常夏の気候で、乾季と雨季の季節がある。乾季は12月頃～4月頃、雨季は5月頃～11月頃である。年間を通して気温は30℃を超えることから、日本の教科書通りに四季の変化や季節によって生活が変わることを児童に実感させることは難しい。活動や体験を通して学ぶ生活科の本質を大切にするために、地域に出る校外学習はスコールの降る時間帯を避け、できるだけ乾季に設定した。

日本では七夕や端午の節句などの季節になると商店街やスーパーマーケットなど地域の身近な場所でも季節の伝統行事を感じることができる。海外生活では学校でやらなければ日本と同じように日常生活の中で日本の季節の移り変わりや生活との関連について感じることは難しいことから、日本人学校では以前から日本の伝統行事や伝承遊びなど季節を感じる活動を行っている。

(1) 「なかよししゅうかい」をひらこう

1年生とペアを組み年間を通して交流を行った。基本的にペアは固定にしたものの、児童の転出入が多い特性上、頻繁に入れ替わった。ペアの1年生に案内するという形での学校探検、「うごくうごくわたしのおもちゃ」の学習で作ったおもちゃと一緒に遊ぶこと、七夕飾りを一緒に作り飾り付けをする「七夕しゅうかい」など1年生を招待する形での「なかよししゅうかい」を定期的に行った。

(2) おおきなあれ わたしのやさい

ホーチミンでは4～5月の気温は35℃を超えることから暑さが少々和らぐ6月頃から野菜を育てることにした。暑さに強く、安価で手に入りやすいベトナム品種のナスを選んだ。

児童が水やりをしても毎日確実にスコールの雨が降ることから、皮肉なことに自主的に水やりをするしなないに関わらず、暑い日差しのもと、どのナスも短期間でぐんぐんと育った。国語「かんさつ名人になろう」で、ローカルの市場でサワガニを児童1人につき1匹を購入し、観察の視点を学習したことからも丁寧な観察を行った。

(3) どきどき わくわく まちたんけん

ホーチミン市は、日本人学校がある7区と経済の中心である1区が在住の日本人の生活圏となっているため、両地域をまちたんけんの対象地域と設定した。

治安の問題や子どもの遊び場が限られているため、児童目線での「おもしろいもの・場所・人」をたくさん見

付け、もっともっと自分たちの住むホーチミンを好きになる活動を多く取り入れるようにした。学校から徒歩10分程度に位置するナムサイゴン公園では日本では珍しい熱帯植物をたくさん観察した。教師にとっても名前の知らない植物だらけなので、児童と一緒に熱帯植物図鑑等で名前等を調べた。

例年はベトナム市場での買い物活動を行っていたが児童数増加に伴い、当時オープンしたばかりの高島屋の見学と「お店屋さん体験」の活動に変えることにした。事前の打ち合わせで受け入れ店舗を調整して頂いた。多くの人にお世話になり、準備が大変な活動であったものの、年度末の生活科の学習の振り返りで多くの児童から「忘れられない思い出となった」と声上がるぐらいの貴重な体験活動となった。

1区のサイゴン動植物園は150年を超える歴史をもつアジア最古の動物園である。動物園の見学では、治安上グループに1人の警備員を配置した上でグループ活動を行った。動物の食事タイムでは子どもが鑑賞中にも関わらず、飼育員が飼育している大きな蛇のケースに生きたウサギを丸ごと放り込むので、蛇がウサギを飲み込む様子を目の当たりにすることとなった。日本では考えられないことが起こりうることもベトナムでは日常茶飯事である。

大きなショッピングモール内や1区の観光名所では、海外からの観光客には英語、ベトナム人にはベトナム語やジェスチャー等、日本人観光客には日本語でのコミュニケーションを通して、教科書とは多少違うものの「地域の人々」と関わり合うことができた。

年間の活動を通して、ベトナムという社会に生きる一員として多様な人々と触れ合うことができホーチミンの良さを感じる活動となった。

3. 「総合的な学習の時間」実践報告

5年生は「日本とベトナムの関係」を、6年生は「困難を乗り越えて頑張る人」を大きな軸として、それぞれ1年間の学習を行った。

5年生の宿泊体験学習は、ホーチミン市南東部にある漁業が盛んな町であるブンタウ市で1泊する。6年生の修学旅行はハノイで2泊し、行程の中でハノイ日本人学校との交流行事がある。これらの宿泊行事も総合的な学習の時間に組み入れながらカリキュラムを組む。

(1) 日本とベトナムの関係

5年生の社会科では、日本の国土の環境や国民生活、農業・水産業・工業生産について学習をする。社会科のこれらの観点に絡めて、地域性を生かし、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動をするために「日本とベトナムの関係」というテーマを設定した。

〈暮らしと環境 ～日本から、ベトナムから～〉

ベトナムはエビの生産国であり、日本や韓国など世界の国々に輸出している。ベンチャー市などメコンデルタ地域での生産が盛んではあるもののホーチミン市南部のニャーバーやカンザーでもエビの養殖が行われている。日本人学校では、例年ニャーバー地域にあるトゥーレーさんの養殖池を見学させて頂いている経緯から連絡を取り見学に伺った。

トゥーレーさんの養殖池では年に3回収穫し、一度の収穫で5000ドル程の収入を得る。しかし、餌代、施設費、稚エビ代など維持費を差し引きすると赤字であり、かつては従業員を雇っていたが賃金が発生するため、今は老夫婦のみで細々と続けているとのことであった。収穫したエビは全て近くの市場に卸しているとのこと、この地域のエビの養殖池の中では規模が大きい方ではあるが、輸出用の養殖池はもっと大きな規模であるとのことであった。そのため日本との関わりを学ぶために日本へ輸出している大規模な養殖池を探してみた。しかし学校から1時間圏内の適当な場所を見付けることが叶わなかった。見学場所の検討は次年度への引継ぎとし、この

年度の校外学習はトゥーレーさんの養殖池の見学をさせて頂くことにした。

見学をきっかけに児童はマングローブとエビの関係、ベトナムのエビの養殖、日本へのエビの輸出など、それぞれがテーマを決めて調べた。ここで学習したことが6年生の総合的な学習の時間の学習に繋がることにもなる。調べたことをレポートの形でまとめ発表会を行った。

〈日本とベトナムの関わり ～工業生産の視点から～〉

日本は自動車輸出大国であったが、2013年以降は輸出量が横ばいとなり、海外工場での現地生産が伸びている。日本自動車工業会によるとベトナムにおける日系自動車メーカーの現地生産工場数は8ヶ所である。そのうちの1つ三菱自動車を生産するビンズン省のVINA STAR MOTORSに見学に行った。この工場では工場管理者の日本人駐在社員の他、多くのベトナム人従業員が手作業で自動車を生産している。工場長によると、世界中の三菱自動車の工場の中で一番小規模だとのことである。児童は歩いて工場内を見学し、自動車製造の全ての工程を丁寧にを見せて頂いた。ベトナム市場を調査し、人気の自動車を生産するとのことであり、これまでパジェロスポーツを組み立て生産していたが、2018年からはSUVのアウトランダーの生産を開始したとのことである。日本の工場との違いや、材料調達等の苦労など海外の現地生産の工場ならではの話をたくさん聞かせて頂く大変貴重な機会となった。海外から日本の工業生産に目を向けることができたことから、日本にとっての海外生産のメリットやデメリットなど、社会科の教科書の学習で終わらずに自分で調べたことをもとに深い議論を繰り広げていた。

日本はベトナムにとって最大の政府開発援助（Official Development Assistance：ODA）提供国となっていることから、ホーチミン市内で身近に行われている都市鉄道工事は「日本とベトナムの関わり」を学習する上では外せないテーマである。日本人学校に通う児童生徒の保護者の中にも都市鉄道関連会社に勤めている人は少なくない。

2020年に完成予定といわれているホーチミン市都市鉄道1号線は、ホーチミン市の中心部と郊外を結ぶ全長19.7kmの大量高速輸送鉄道（Mass Rapid Transit：MRT）路線である。都市鉄道工事の関連会社に5年生児童の社会見学の依頼をすると快く引き受けて下さった。このプロジェクトをコンサルティング業務でサポートしている日本工営株式会社（以下、同様に会社名の敬称略）が主な日本企業に連絡を取り、半日で3社を回る見学行程を組み、案内を行って下さった。

バソン駅周辺工事を行う清水建設株式会社と前田建設工業株式会社の共同企業体が掘削機での工事の様子や地下トンネルを案内して下さった。タオディエン駅周辺工事を行う住友商事株式会社は、高架工事の様子を案内して下さった。バンタイン駅周辺工事を行う三井住友建設株式会社は地下鉄駅構内の模型を使っての説明やトンネルを掘る工事を展望台から案内して下さった。1本の鉄道が駅によって工事する会社が異なり、建築条件の違いから地下鉄部分だけでも掘削方法が大きく異なる。児童は、この学習を通して、「日本とベトナムの関係」を学ぶだけでなく、将来は世界で役に立つ大人になりたい、世界で活躍できるようになりたいという思いをもっていた。見学に行ったときに、どこの企業でも日本人学校に通う児童の保護者が案内をして下さったことから「友達のお父さんの会社」と、身近に感じたようであった。日本のODAや、日本とベトナムに関連することをさらに詳しく調べてレポートにまとめ、発表を行った。

〈困難を乗り越えて頑張る人〉

ベトナム戦争では終焉を迎えた1975年以降、40年以上経った現在も未だにホーチミンの街や人々の生活などに戦争の爪痕が残っている。1962年から1971年にかけてアメリカ軍が軍事作戦で行った枯葉剤散布の結果、ベトナムの自然環境破壊だけでなく、その影響から現在も被爆者本人から子、孫へと3世代に渡り奇形児が産まれ続けている。1988年に日本赤十字社の医師の立ち合いのもと分離手術が行われた「ベトちゃんドクちゃん」もこの枯葉剤被害の可能性があるとされている。

日本人学校の6年生の総合的な学習の時間の学習では、ベトナム戦争についての調べ学習、ベトナム戦争に出征した経験をもつ本校用務員の講話、「ベトちゃんドクちゃん」が分離手術を行ったツーズー病院の平和村の見

学、グエンドクさんの講話を行った。平和村では奇形をもった子ども達が生活をしている。平成27年度の交流活動では、模造紙と一緒に絵を描いたり、風船や絵本の読み聞かせなどを行った。平和村に入る前や入った直後の日本人学校側児童は、奇形をもつ子ども達の見かけの姿に驚きを隠せず交流をためらう様子が見られた。時間が経つにつれて、言葉の壁も感じないぐらいに交流を楽しみ、「また行きたい」「今後も交流を続けたい」と笑顔で話す姿が見られた。グエンドクさんの講話では、分離手術前の生活や、手術のこと、日本との関わりについてのお話をしてくださった。児童の素朴な疑問に対する質問にも全て丁寧に答えて下さった。

枯葉剤散布の影響から自然環境が破壊されたカンザー地区のマングローブの森の見学にも行った。例年、保護施設の方の講話を聞く活動を行っていたが下見に訪れた時に、例年の講話を聞く活動をやめてマングローブの植林活動に変えたいと思立った。というのも、保護施設の方々は、失われた環境を取り戻そうとマングローブの植林活動を行っているわけではなく、「単に仕事だから」と言い、マングローブの植物に関しても知識がほとんどないことがわかったからである。「人々の意識を変えて環境を守る」ことも大事かもしれないが、生きるのに精一杯である発展途上国の人々には自分自身の生活に直結しない「環境を守る」意識をもつことは難しいのではないかと考えさせられた。せめて、「マングローブの植林という活動を行うことから結果的に環境保全に繋がる」という方法でもよいのではないだろうかと考えさせられることとなった。植林した木が成木するのに35年の年月がかかると聞き、児童は「35年後にまた見に来てみたい」という感想をもっていた。

毎年のように日本から著名人が日本人学校を表敬訪問される機会があり、この年度にはサッカー日本代表の本田圭佑選手が日本人学校を訪れた。本田選手の講話からも「努力」「困難」など総合的な学習の時間で学んだことと関連させ、将来の自分について多く考えたようであった。

4. 終わりに

日本の教科書通りには学習が進まない生活科や総合的な学習の時間の実践では、社会情勢の目まぐるしい変化のスピードに合わせて、日本以上に常々臨機応変な対応が求められた。その都度、無理難題を持ち掛けてもできるだけこちらの意向に寄り添おうと多くのベトナム人や、ベトナムで生きる日本人の方々の力を借りることとなった。そのおかげで地域に根差した実践を数多く行うことができ、児童がよりベトナムを好きになるきっかけとなったと思われる。関係した方々への感謝の意を示したい。